

1 特別支援教育の概要

近代の教育システムにおいて、1878（明治11）年、京都盲啞院が開校したこと、1923（大正12）年、盲学校及び聾学校令において、盲学校・聾学校の設置を義務付けた史実から、特別支援教育は視覚障害や聴覚障害教育が牽引してきたといえるでしょう。一方で、弱視教育は、1933（昭和8）年12月の東京都麻布区南山小学校に弱視特別学級開設まで待たなければならなかったという実態もあります。実は、この弱視学級の設置において、眼科医の貢献はとても大きいものでした。様々な貢献がありましたが、日本眼科医師会会長 須田卓爾氏が、内務・文部両大臣に提出した「弱視児童ノ特殊学校設立二関スル件」は、弱視学級設置を大きく前進させました。また、第二次大戦を挟んで、弱視教育のアプローチは大きく変わりました。戦前は、「消極的保護」として、眼を使用しないことによる視力低下の防止だったのに対し、戦後は、「積極的保護」として、眼を使用することによる保有視力の保持、定着、さらには視知覚の向上を図ることが進められました。これらも、医学の発展が大きな影響を与えています。このように弱視教育と医療はとても大きな関係があります。現在、視覚特別支援学校の在籍者は減少してきており、地域の小中学校に通う視覚障害者が増えています。このことから、地域の眼科との連携はとても大切になってきています。本講座が少しでもそのお役に立てば幸いです。

2 視覚支援の指導の実際

視覚障害者の通常学校での学びや、社会進出を考えた時、パーソナルコンピュータの操作技術の習得は必須です。これは疑いようのない事実として捉える必要があります。具体的には、中学卒業時にはタッチタイプ（最近では、ブラインドタッチという語は用いない）やショートカットキーによる操作は習得し、高校卒業時にはワープロ、スプレッドシート、ファイル・フォルダ操作などの視覚障害者ならではの効率的な操作方法の習得は必須です。最近では、それに加えて、タブレットやスマートフォンを導入することで、さらにパフォーマンスを上げることができるようになってきています。

3 タブレットの効果的な活用

弱視者支援のアプローチとして、見やすい「大きさ」、高い「コントラスト」、認識しやすい「スピード」の3つを挙げるすることができます。数ある視覚補助具の中で、これらのアプローチに対応できる機器は、タブレットやスマートフォンなどの携帯型デバイスだけであると考えられます。大きくするためにはiOS機器であれば、アクセシビリティ機能の拡大鏡機能の利用が効果的・効率的です。コントラストも、拡大鏡機能で露出を調整したり配色を変えたりすることで高められます。スピードはカメラアプリをもちい、遅くするにはスロー撮影、速くするにはタイムラプスを用いると効果的です。ただ、二値化技術で拡大読書器、携帯性・即時性では弱視レンズも効果的ですから、目的と利用者の力量に応じて選択したり、使い分けたりすることが大切です。